

壁を乗り越えてつかんだ幸せ

秋田県大仙市立仙北中学校

三年 須 田 小 雪

世の中は、様々な「音」であふれている。人々の会話や笑い声、悲しんでいる音などいろいろある。それらは毎日聞く音だ。しかし、「もし世の中の『音』が聞こえなくなったらどうなるのだろう」と考えたことはないだろうか。人は耳が聞こえなくなると、どんな気持ちになるのだろうか。それを知るには実際に耳の聞こえない人に聞くか、あるいは自分で耳をふさいで体験してみるしかないだろう。

ただ、「聞こえない」という「壁」は想像を上回るほど辛いものだということはわかる。なぜなら、私とその「壁」を現在も経験しているからだ。

私が四歳だったとき、大きな音に反応するもの、母が呼ぶ声には反応しなかったそうだ。そこで秋田市にある総合病院で調べてもらおうと、「感音性高度難聴」ということがわかった。私はほとんど記憶にないが、おそらく両親はかなりショックだったろう。初めての子どもが耳が聞こえないのだから。今思えば、この四歳の時点から十年以上かかって今の私があると思うと、信じられないという気持ちである。

小学校に入学した私に、サポートの先生がつくことになった。不安なこともあったが、ゆつくり学校に慣れていった。そのころ、友達に「耳につけて

のって何」と聞かれたことがある。はつきりとは覚えてはいないが、確か「補聴器っていうんだよ」と言っただけだ。ただ、「耳につけているものを見せて」と言われたことは鮮明に覚えている。他の人の耳にはないものをつけている私が、友達には珍しかったのかもしれない。

しかし、私が小学校四年生のとき、「先生からサポートを受けているから、怒られることがない。成績もいいし、えこひいきされている。ずるい」と友達から陰口をたたかれた。さらに、友達が蹴ってきたり、わざとぶつかってきたりした。いじめだ。「どうしてみんなからいじめられなきゃいけないの。補聴器をつけているからなの。」と複雑な気持ちだったし、そう思う自分に葛藤もしていた。しかし次の日も学校で蹴られて、私は辛くて母に告白することにした。母は私の話を聞いてくれ、学校に連絡してくれた。

その後、学年が変わると私に対するいじめがなくなった。どうやら母の電話を受け、五年生の頃の担任の先生とサポートの先生が、私をいじめていた人たちに指導してくれたそうだ。いじめがなくなると、心につかえていたものが取れたかのように自然と気持ち落ち着いていった。また、補聴器をつけていることに対する、葛藤もなくなっていた。

私が現在通う中学校には二つの小学校の生徒が入学する。だから、入学時、他の小学校の子と一緒に過ごすことは不安だった。しかし考えていたよりも恵まれた環境、そしてたくさんいい先生方に出会うことができた。「辛いこともたくさんあったが、それらを乗り越えてきたから今の私がある。今が人生で一番幸せかもしれない。たくさんの人に感謝したい。」と最近、今までのことを考えて思うようになった。私を理解してくれる先生方、友達などい

いるな人に感謝している。中でも一番感謝をしているのが母だ。

「ここまで来るのに十一年かかったなあ。耳が聞こえないって分かったとき頭の中が真っ白になったけれど、『だからこそ、この子達のことを一人前に育てよう』と強く思ったんだよ。」と母は中学生の私にこう話してくれた。私は自然に涙が出ていた。私には妹がいるが、妹も補聴器をつけている。私自身、これまで大変だったと思っていたけれど、難聴者を見たことも聞いたことも、もちろん育てたこともない父や母は、何もかもが初めてで、毎日本当に大変だったのだろう。そんな父や母が今まで私に言ってくれた言葉や、してくれたこと、叱ってくれた言葉を思い出だけで、どんなに私のことを考えていてくれたかが、今ようやく分かった気がする。私がかここまで成長できたのは、父と母のおかげである。

今、私は中学校三年。まだこれからの人生は長い。そんな長い人生の中には、これまで立ちふさがった「壁」以上の「壁」が出てくるかもしれない。しかし、私は次の壁も乗り越えられるはずだ。どんな「壁」が私を立ちふさがろうとしても、いつも私を側で応援し、助けてくれる人がいるのだから。だから、私はいつも前を向いて、胸をはって生きていこうと思う。

私がこの作文を書くことと思ったきっかけは、三年生になり、今までのことをふり返る機会が多くなってきた中で、これまでの自分を素直に書きたいと思ったからです。私のように障害があっても、様々なことを乗り越えて明るく前向きに頑張っている人がいることを、この作文を通して知ってもらえたらうれしいです。

作文を書くに当たって